

民族衣装の既製服化

—中国雲南省のミャオ族衣装の変化の様相—

宮脇 千絵

総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

本稿の目的は、中国雲南省のミャオ族（自称はモン）の民族衣装の変化について、既製服化という現象に焦点を当ててその過程と特徴を明らかにし、既製服化することで民族衣装とその担い手であるミャオ族自身の生活の何が変化したのか、あるいは変化していないのかを考察することである。

雲南省文山のミャオ族は現在でも民族衣装を製作し、日常的に着用している。しかし1990年代以降、そこに大きな変化が訪れている。それが既製服化である。

1980年代まで、ミャオ族の衣装は大麻を原料とし、家庭の女性によって製作されていた。このような衣装の特徴は、作り手の意匠による微細な変化はあるものの従来のスタイルから逸脱することがないこと、そして晴れ着と日常着の違いが新旧の差であったことである。

1990年代に入り、専門の服飾工場や個人経営者によって既製服化がはじまると、製作作業の工程が分業され効率化が図られた。また工業生産された化繊布を使用するため、デザインや色が大きく変わり、流行がみられるようになった。そしてそのことにより晴れ着と日常着の差異は流行のものかどうかになった。

そして既製の民族衣装は、アメリカのモンからの購入により進展するとともに、地元文山での購買力をも増加させている。いずれにしても、経営者は個人の裁量によって消費者を獲得しているし、その消費者とはたとえ国境を跨いでいても、ルーツとアイデンティティを共有するミャオ族（モン）自身なのである。

地元文山でも既製の民族衣装の購入が増えているが、ミャオ族女性たちの日常生活における動作と姿勢から要求される機能性、および結婚式や儀礼の際に現れるミャオ族としての価値観をみると、ミャオ族が自然に既製の民族衣装を受け入れている様子が分かる。

以上から、既製服化にともない製作方法、デザインや色、装い方が変化したことが明らかになる。そしてミャオ族の民族衣装の既製服化にみられる特徴は、個人の裁量による「大量」生産、および消費者は個人的繋がりに基づいた「顔の見える」相手であることがあげられる。しかしそれらが「ミャオ族の衣装」として認識され続けていることに変化はない。ミャオ族は既製服化という急激な変化を従来からの断絶とはとらず、これまでの延長であるとはとらえ、ただミャオ族としてミャオ族の衣装を着用し続けているのである。

キーワード：ミャオ／モン族、民族衣装、既製服化、変化

1. はじめに
2. 国境を越えて分布するミャオ族とモン
3. 文山ミャオ族の「伝統的」民族衣装
 - 3.1 製作と着用
 - 3.2 デザイン・色・装い方
4. 既製服化の様相—服飾工場の事例から
 - 4.1 服飾工場の成り立ち
 - 4.2 製作
 - 4.3 素材・デザイン・色・装い方
5. 「伝統的」民族衣装と既製の民族衣装の比較
6. 既製の民族衣装の流通
 - 6.1 アメリカのモンとの出会い
 - 6.2 地元文山での需要の高まり
7. 既製の民族衣装をどう着るか
 - 機能性と価値観から
8. おわりに—変化したものとしていないもの

1. はじめに

本稿の目的は、中国雲南省のミャオ族の民族衣装¹⁾の変化について、既製服化という現象に焦点を当ててその過程と特徴を明らかにし、既製服化することで民族衣装とその担い手であるミャオ族自身の生活の何が変化したのか、あるいは変化していないのかを考察することである。

中国雲南省文山壮族苗族自治州文山县（以下、文山と略）のミャオ族居住地域を訪れると、ミャオ族女性たちが色鮮やかな衣装を身に纏っている様子を目にすることができる（写真1）。農村に居住するミャオ族女性は、現在も日常的に民



写真1 ミャオ族の衣装

族衣装を製作し、着用している。この10年ほどで染織こそ次第に行われなくなったが、農作業の合間に刺繍に精を出したり、家の軒先でミシンに向かったりして衣装製作を行なっているミャオ族女性の姿は今なお健在である。このような状況は、中国の多くの少数民族の衣装が、洋装化の影響によってハレの日の着用のみに留まったり、あるいは観光資源の一部に組み込まれていたりするなど、日常着としての役割を果たさなくなっている現状とは対照的に感じられる。

しかしミャオ族の衣装も変化と無縁というわけではない。文化人類学において、民族衣装とは時空間によって変化するものとされているように [Polhemus and Proctor 1978: 13, Eicher 1995: 4]、ミャオ族の衣装も例えば刺繍や染めの模様、素材や着こなし方などといった細部にその時々状況に応じた変化がみられる。

さらにこの10数年で、上述のような微細な変化とは異なる性質を持つ急速な変化をむかえている。それが既製服化である。文山の定期市²⁾では、既製のミャオ族衣装や、あるいは工業生産されたカラフルな化繊布や装飾品を販売している店舗が多数並び、ミャオ族女性たちの関心を集めている。そして、それらは地元のみならず中国外に居住するモンにむけても販売されている。モンについては次節で詳細を述べるが、中国のミャオ族をルーツにする人々であり、そ

のなかでもアメリカに居住するモンは中国、特に文山を精神的な故郷だとみなしており、死後に魂が帰る場所だと考えている [Schein 2004: 273]。アメリカでの生活環境では従来のような衣装製作を行うことが困難なこともあり、1992年に文山を訪れた者によって中国のミャオ族衣装がミネソタ州セント・ポールのモン・コミュニティに持ち込まれ、新年の儀礼で着用されるようになった [Lynch 1999: 66]。その他にもオーストラリア [Wronsk-Friend 2004: 113] や、ベトナム [Hammet 2004] のモンの間でも1990年代以降、文山で製作された衣装が人気を得ていることが報告されている。このように中国で製作されたミャオ族衣装は、中国外ではアイデンティティの拠り所となっているが、それが中国においてどのように製作されているかは明らかでない。

また、このように民族衣装が既製服化し国境を越えて流通している様は、今日世界各地で広くみられる民族衣装のファッション化 [中谷 2007、杉本 2009]、およびそのグローバル化現象として理解できるかもしれない。

もともと既製服とは、アメリカにおいては不特定多数の労働者を対象に作られたものであり [鍛島 1980: 109]、ミシンの実用化によって大量生産の組織化が行なわれた [鍛島 1981: 88]。その特徴は、体型を標準化させること、大量生産によって安価に販売すること、そして大量に売するため流行と無縁でないことにある。これは民族衣装の既製服化にもおおむね当てはまる。違いは、そこに生産地の地域性や民族性という付加価値がつくかどうかである。

今日、観光化や外国資本の参入あるいは政府の政策などによって、民族衣装や布が商品化する現象はあらゆる地域でみられる [ウォーターベリー 1995、関本 2000、今堀 2006、Phan and Ikemoto 2008]。それらは観光客に購入されたり、西欧のファッション従事者に利用されることによってグローバルに流通し、消費される。そして、例えばインドネシアのバティックが、国際的マー

ケットにおいて産地コミュニティのアイデンティティに価値をもたせる反面、消費者にはその産地に無縁で不特定な人々が想定されている [関本 2003] ように、商品化しグローバルに流通している民族衣装や布はローカルなコミュニティの地域性や民族性を再生産しながら、生産者と消費者の距離を地理的にも心理的にも広げる結果となっている。

本稿が扱う雲南省文山では、前述したとおり、ミャオ族衣装が既製服化して販売されているが、その販売者も購入者もほとんどがミャオ族あるいはモンであり、そこに観光客に代表されるようなミャオ族衣装に無縁な人々の姿はない。またデザインや色合いに流行があり、次々と新しいスタイルが生み出されているが、そこに地域性や民族性が意図的に埋め込まれたり再生産されたりしているような状況もみられない。

それでは、ミャオ族の民族衣装はいかに変化し既製服化してきたのか、そしてその特徴はどこにあるのだろうか。それを明らかにしていくために、本稿ではまず文山の農村においてミャオ族衣装が、従来どのように製作され着用されてきたのかを述べる。続いて、ミャオ族の服飾工場を事例に取り上げ、既製服としての民族衣装の製作法、デザインの移り変わりをみる。そして個人経営者の事例も加えて、アメリカと地元における流通について説明をする。最後にそのような既製の民族衣装がどのように受け入れられているかを農村での着用のされ方から考察する。そして、既製服化という大きな変化が、ミャオ族の衣装と彼らにどのような変化をもたらしたのか、そしてもたらさなかったのかを明らかにする。

本稿のもととなった調査データは、筆者が2004年10月に1週間、2005年8月に1週間、そして2006年9月から2009年3月までの2年半の間に行なった、雲南省文山州でのインタビューや参与観察などの調査結果によるものである。

2. 国境を越えて分布するミャオ族とモン

ミャオ（苗、Miao）族は、中国では55の少数民族のひとつに認定されており、貴州省や雲南省を中心とする中国西南部に分布している。言語はシナ・チベット語族ミャオ・ヤオ語派に属しており、自称と方言によって大きく3つの集団に分けられる。それはムー（湘西方言）、コー・ション（黔東方言）、モン（川黔滇方言）であり、それらはそれぞれさらに細かい下位集団に分けられる。

このうち雲南省に居住するモン（Hmongb）³⁾と自称する人々の一部は、19世紀にベトナム、ラオス、タイといった東南アジア大陸部に移動し、山間部で焼畑農業を営みながら生活をしてきた。ラオスのモンは山岳地域に精通していることから、ベトナム戦争時に米軍CIAの特殊攻撃部隊として訓練され、共産主義勢力（パテート・ラオ）と戦うことになった。だが1975年にサイゴンが陥落し米軍が撤退した後、ラオスに置き去りにされたモンは共産側から報復されることとなる。そのため多くのモンが命がけでタイへ移動し、難民キャンプに収容されたのち、その一部が1976年以降、アメリカをはじめとする欧米各国に難民として移住した。現在、ミャオ／モン族は、中国（約900万人）、ベトナム（約80万人）、ラオス（約30万人）、タイ（約15万人）、アメリカ（約17万人）、フランス（約1万人）、オーストラリア等に居住している。ミャオ／モン族は移住を繰り返し、国境を隔てて広く分布している民族だといえる。

本稿の調査地である雲南省文山州文山市は、省都昆明から東南に約350キロ、ベトナムとの国境に近い地域にある。州内には8つの県があり、文山市にはその州政府がおかれている。漢族のほかにチワン族、ミャオ族、イ族、ヤオ族など11の少数民族が居住している。現地の人々は、それぞれの居住地域の分布について「漢族は町に、チワン族は水辺に、ヤオ族は林に、ミャオ族は山に住む」と言い表す。州内に居住するミャ

オ族の自称はモンであり、モン・スー（Hmongb shib、他称は花ミャオ）、モン・ジュア（Hmongb nzhuab、青ミャオ）、モン・ドゥロウ（Hmongb dleub、白ミャオ）、モン・ボア（Hmongb buak）、モン・ソウ（Hmongb soud）、モン・ベイ（Hmongb bes）、モン・スア（Hmongb shuat）の7つのサブ・グループが居住しているとされている〔文山壮族苗族自治州苗学発展研究会編2008: 6〕。

1990年代に入り、アメリカに居住するモンが「故郷を訪問する」目的で、中国のミャオ族居住地域を訪れるようになった。蒙の言葉で「バン・ドウ（Bangx Deus）」と呼ばれる文山は、東南アジアやアメリカの蒙の故郷であるとされている。移民先のアメリカで経済的に余裕の出た若年層を中心に、かつての故郷を訪問するようになり、文山のミャオ族とアメリカの蒙のあいだに個人レベルでの交流が生まれている。

本稿が対象とするのは、中国に居住しているためミャオ族と呼ばれているが、自称はモンであり、東南アジアやアメリカのモンと、言語、文化、歴史意識など多くの共通点を持つ人々である。なお本稿では、文山に居住する者を指すときは、中国語での表記をもとに「ミャオ族」、中国外に居住する者を指すときは「モン」と表記する。

3. 文山ミャオ族の「伝統的」民族衣装

文山のミャオ族の衣装は、上着（chaot）、スカート（dab）、前掛け（vux yaob）、腰帯（hlangb）、脚絆（ntrongb）、頭巾（puaf）などから成る（写真2）。上着は前身ごろが右開きする形で袖は長袖、襟から胸の部分や袖にサテン・ステッチ（lous hak）⁴⁾が施されている。スカートは長さ5～6メートル⁵⁾の布に細かいプリーツを付けた膝丈の巻きスカートである。スカートには、藍によるロウケツ染めやクロス・ステッチ（lous leuf）⁶⁾が施される。前掛けや脚絆にもクロス・ステッチなどの装飾が施される。

着用する際には最初に上着を着る。上着の裾



写真2 ミャオ族の衣装

にスカートを重ねて巻き、スカートの巻き終わりを身体の正面にもってきて、両端の紐を調整しながら腰で結ぶ。そしてスカートの巻き終わりの部分を隠すように、前掛けを重ねる。後ろにつけるタイプの前掛けもあり、前後に2枚の前掛けをすることが多い。そしてスカートや前掛けの腰紐を隠すように腰帯を巻き、後ろで結ぶ。膝丈のスカートから出た素足には脚絆を巻く。未婚女性は、長い髪をうしろでひとつに束ねているだけだが、既婚女性は、髪の毛を頭部の前方でまとめ、ボリュームを出すための毛糸や布とともにねじり、頭に巻きつけ、その真ん中に櫛を挿す。この髪型を「ゴウ・トア・ホア (god doab hoat)」という。ゴウ・トア・ホアにした頭部に、長細い布を巻いたり、あるいは正方形の頭巾をかぶせたりする。

ミャオ族の衣装はサブ・グループごとに差異があるが、それが最も顕著に現れるのはスカートである。文山県に多く居住するモン・スーのスカートは、腰部分を指すシー・ター (shit dab)、中段の藍によるロウケツ染めが施されているトー・ター (ntot dab)、裾の刺繍を施したタン・ター (dangb dab) の三つのパーツから成っ



写真3 モン・スーのスカート

ている (写真3)。

農村では、世代ごとに差はあるものの、現在でも多くの女性がミャオ族の衣装を着用して日常生活を送っている [田口・宮脇2008]⁷⁾。大まかな世代差をみると、学校に通っている10代の少女は日常ではジーンズやTシャツといった洋服を着用していることが多く、20代～50、60代くらいの既婚女性たちは、上半身は状況により民族衣装あるいは洋服 (Tシャツやブラウス、セーターなど)、下半身は民族衣装 (スカート、前掛け、腰帯、脚絆) であることが多い。60代以上の老年層の女性は、全身に民族衣装を着用している傾向にある。小学校にあがるまでの幼児や子供も、ミャオ族のスカートをはくことが多い。

3.1 製作と着用

1980年代まで、ミャオ族の衣装は麻を主原料として製作されていた。モンの布 (ndoub Hmongb) といえば麻布を指すことから、彼らが衣装の素材として麻を重視してきたことが分かる。彼らが使用する麻は大麻 (学名 *Cannabis sativa* L.) である。一年草である大麻は、焼畑農業を営みながら移動を繰り返してきたミャオ族の生活環境に沿ったものであった。

衣装製作は女性の仕事である。ミャオ族は毎年、旧正月と花山節⁸⁾ にむけて新しい衣装を準備する。自分のものだけでなく、夫、子供、義

両親などの衣装製作も一手に引き受ける。以下に麻の栽培からはじまる衣装製作の過程を簡単に紹介する。

3.1.1 麻の栽培と染織

麻は春に作付けし、夏に収穫をする。その後、収穫した麻は束にして、数日乾燥させる。そして表皮を剥いて繊維にし、竹で作った紡錘を使用しながら撚り継いで一本の長い繊維にする。それを足踏みの糸撚り器にかけ、その後十字型の大型糸巻きにかけ、かせをつくる。そして精錬のために3、4回ほど灰汁で煮て川で洗い、糸を白くする。また糸が乱れないようにミツでも煮る。さらに艶を出すために、糸の上に石製のローラーを乗せ、その上に女性が乗ってローラーを転がす。再び十字型の大型糸巻きでかせをはずし、T字型に組み立てた枝を地面にさして整経を行ない、綜統通し、箆通しをして織機に設置する。経糸となる糸は、小さな糸撚り器で杼のボビンに巻く。そして家の軒先や2階などで機織を行なう。ミャオ族の織機は2枚綜統で、織りは平織りである。経糸は180本か200本⁹⁾で、幅は1尺（約33センチ）である。緯糸の長さは、12ドゥラン（約18メートル）か8ドゥラン（約12メートル）のものが多く、この幅1尺、長さ8ドゥランの布が、スカート1枚分になる。

3.1.2 ロウケツ染めと藍染め

ロウケツ染めはスカートのトー・ター部分に使用される。織りあがった布にロウやミツで幾何学模様を描いて、6～7月ごろに藍で染め、水洗いしてロウを落とし、描いた模様が白く浮き上がらせる。ロウケツ染めは、銅製の三角形の刀型をした道具で描く。ロウケツの図案を描く作業は農閑期の冬に行うことが多い。またロウケツ染めの他にも、単色の藍染めも行い、石製のローラーで光沢をつける。

3.1.3 刺繍

白いままの布や藍染めをした布に刺繍を施す。刺繍は主に2種類ある。スカートのタン・ター部分や前掛け、脚絆などに使用されるクロス・ステッチと、上着に使用されるサテン・ステッチである。刺繍糸には、絹糸や綿糸、毛糸などが使用される。刺繍には、幅1尺の織り布を半分に裁断した布、つまり幅15センチほどの布が多く使用される。女性はこの布を年中携帯し、手があくと刺繍を行なっている。

3.1.4 縫製

仕上げた布を縫製してスカートや上着などに仕上げていく。従来は麻糸を使用し手縫いしていたが、1980年代に農村にも足踏みミシンが普及し、ミシンを使用するようになった。

3.1.5 スカートのプリーツ付け

さらにスカートにはプリーツを付ける。それぞれのパーツを縫製した5～6メートルの長さの布を、板などの上に置き、指で幅約1センチの細かいプリーツを取る。そしてそれをしつけ糸で固定をする。しつけ糸の数は1枚のスカートで20～30本にも及ぶ。しつけ糸でプリーツを固定されたスカートは、旧正月の直前に、かまどの鍋で蒸される（写真4）。鍋に枝をわたし、その上にざるを置いてスカートを乗せ、ビニールなどで覆い、10分ほど強火で蒸す。そうすることで、プリーツを固定させることができる。蒸し終わっ



写真4 スカートをかまどで蒸す



写真5 歩きながら麻の紡績をする女性

たら腰部分の数本を残してしつけ糸を抜き取る。

このような衣装製作は、農作業や家事の合間に行なわれるため、女性にとって重労働であった¹⁰⁾。どの作業が一番大変だったかと聞くと、紡錘を使っての紡績の作業を挙げた者が多かった。これは農作業の行き帰りなどに歩きながら行なうことが多いため、疲れが増すのだという(写真5)。また撚りをかけた麻糸やロウケツ染めを施したあとの麻布などは何度も水洗いをしなければならぬが、水源に乏しい土地に住む彼女たちにとって、付近の池に出かけて洗うことは一日がかりの労働だった。最も時間がかかるのがクロス・ステッチとサテン・ステッチの刺繍である。女性たちは年中、常に刺繍の布を持ち歩き、農作業や家事の間のわずかな時間を惜しんで針を運ぶ。またスカートのプリーツ付けは、集中すれば2、3日でできるためそれほど大変ではないと言うが、一般の家庭には机がないため、腰掛けた自分の膝にベニヤ板を置き、その上に布を広げてプリーツを取ることもあり、無理な姿勢による作業負担が大きい(写真6)。

そして麻製の衣装は重いと女性たちは語る。



写真6 スカートにプリーツを付ける女性

麻で作られたスカートは、重量が1～1.5kgあり、着用するのも洗濯するのも大変である。また現在60歳以上の女性たちはかつてこのような重いスカートを2、3枚重ねてはいていたという。労働時には内側にきれいなものを、外側に汚れてもいいものをはいていた。汗をかけば内側のものを脱ぐことができるし、風が吹いてもまくれあがらないという利点もあった。またもともと下着をつける習慣がなく、スカートを重ねることで月経時の経血を目立たなくさせるという役割もあったという。上着も寒い時期には2、3枚重ねて着用する。

洗濯も家庭の女性の仕事である。ミャオ族は汚れるまで同じ服を着続ける習慣を持っているため、洗濯は数週間に一度まとめて行なうことが多い。特に水分を含んで重くなったスカートは足を使ってもんだり、棒でたたいたりして洗う。家族の分まで一緒にする洗濯は、農作業に行かなくてよい日に行なう一日仕事である。

3.2 デザイン・色・装い方

このように製作、着用されてきた衣装の特徴は、固定的なデザインと自由な色の組み合わせ、

そしてハレの日の衣装と日常の衣装の違いが単に新旧の差にあったことである。

前述したようにミャオ族のスカートはサブ・グループごとに異なるが、モン・スーの3つのパーツに分かれたスタイルは2000年前後まで踏襲されてきた。色や刺繍などの細かい部分にその時々、の製作者や着用者の好みは反映されていても、この三段に分かれたスタイルは変わっていない。上着は前身ごろが右開きになっている形をしているが、このスタイルも継承されている。つまり細部がゆるやかに変化していても、従来受け継がれてきたデザインから大きく逸脱することはないのである。

そして色合いも限定されていた。スカートの藍色（ロウケツ染め）と赤を基調とした色合い（刺繍）、および上着の赤、青、緑、黒といった濃い単色を、好みで組み合わせていたという。スカートの色合いが固定されていたため、1980年代と比較的早くから化繊布が使用されてきた上着の色にバリエーションがあっても、着用者は自分で色合わせを楽しむことができた。

ミャオ族は毎年、旧正月にむけて新しい衣装を準備する。新年に着用したきれいな衣装はしばらくのあいだ知人の結婚式や葬式、定期市に出かける時など余所行き着として着用される。次第に汚れが目立つようになると日常の労働着となる。さらに古くなったスカートは、しつけ糸を抜き取りプリーツをのばして、2、3枚に裁断され、労働時にスカートの上に重ねて着用する作業用エプロンとなる。そして最後には雑巾として使用され捨てられる。つまり、デザインや色が比較的固定されていたこともあり、晴れ着と日常着の違いは、新しいか古いかの差でしかなかったのである。

それではこのようなミャオ族の衣装が、既製服化することでどのように変化したのだろうか。

4. 既製服化の様相—服飾工場の事例から

現在、文山の定期市を訪れると、従来の色合



写真7 定期市で販売されるミャオ族の衣装

いやスタイルとは異なるカラフルで斬新なデザインの衣装が販売されている様子を見ることが出来る（写真7）。値段は素材などにもよって異なるがスカートや上着は40～100元、前掛けや腰帯は10～30元であり、ここ数年は一式（スカート、上着、前掛け、腰帯、脚絆、帽子）まとめて200～500元ほどで購入する者も多い。このような既製の民族衣装はどのような場所でいかに製作されているのだろうか。文山でミャオ族衣装の製作、販売に従事しているのは、大別してJ民族印染工場と個人経営者がいる。個人経営者はさらに、町に店舗を持つ者と、定期市を行商する者に分けられる。その多くがミャオ族の既婚女性である。彼女たちの多くは、自分ひとりで衣装製作を行なうのではなく、それぞれ数名の内職者を抱えている。その内職者も、本業の合間に自宅において内職として行なう既婚女性と、経営者の店舗や自宅に住み込んで働く農村からでてきた未婚女性に分けられる。

ここでは、現在まで文山州で唯一のミャオ族の衣装の製作工場であるJ民族印染工場を事例に取り上げ、販売されている衣装の製作法、素材やデザインの流行の移り変わり、流通先について概観する。

4.1 服飾工場の成り立ち

J民族印染工場があるのは、文山県の中心の町から東南に約3キロのQ村である。Q村は、68戸約280人（2006年）のモン・スーの村である。

Q村は1958年ごろに、県内の山間部のいくつかの村の住民が、政府の移住政策によって移住してきてできた。移住してきた当初は、着るものにも食べるものにも苦勞をしたというが、2004年に上海資本の援助を得て「脱貧奔小康示範村（貧困を脱し暮らし向きが安定している模範的な村）」となった。同年には中心の町から村までの市内バスが開通し、町へのアクセスも容易になった。農地の多くは、浙江省からきたスイカ栽培や樹木栽培を行なう業者に貸し出され、多くの村人は減少した農作業の代わりに、町へ日雇い労働に行ったりしている。周辺のミャオ族の農村に比べ、比較的生活水準のよい村である。

その村の入り口、幹線道路沿いに位置するのがJ民族印染工場である。Q村に住むT氏は村公所¹¹⁾の村長を勤める傍ら、1980年代後半から自宅で細々と衣装製作と販売を行なっていたという。転機は1989年11月であった。当時党総書記であった江沢民が文山を視察に訪れ¹²⁾、Q村を訪問しT氏と面会をした。T氏は江沢民に激励されたことに鼓舞され、1991年に、ミャオ族の民族衣装を保存する目的と、ミャオ族女性に就業の機会を与える目的でJ民族印染工場を設立した¹³⁾。創業したばかりのころは、妻、長女、次女、長男の妻などと自宅で作業を行っていたが、その後1995年に耕地だった場所に工場としての建物を建設し、2004年には増築を行った。

T氏が工場長を務めているが、実務を担っているのはT氏の末娘（四女）のLさんと、T氏の姪であるCさんという2人の30代の女性である。彼女らが工場の経営、工員の確保、町での素材の買い付け、仕事の分配や仕上がりのチェック、販売の決定などすべてを取り仕切っており、可能な限り自分たちも作業に加わっている。

工員は平均して常に15～20人がおり、そのほとんどがミャオ族の10代の未婚女性である。親戚や知り合いのつてなどで小学校や中学校を途中で退学して働きに来ている者が多い。最近は、広州からの出稼ぎ帰りでミシンを扱える10～20



写真8 J民族印染工場の作業場

代のミャオ族男性の数も増えている。何年も働き続けている者がいる一方で、たいていの者は結婚などを機に数ヶ月から1年程度で辞めていく。

4.2 製作

工場は、中庭を取り囲むように建てられた平屋の家屋から成る。そこに作業部屋のほか、ミャオ族の衣装や染織の道具を展示している展示室、会議室、倉庫、食堂、シャワー室、工員たちの寮、T氏夫婦やLさん、Cさん家族の居住部屋、T氏の三女が経営している売店などがある。工員たちはビーズ縫い、プリーツ付け、ミシンの3つに分かれ、それぞれの仕事を担当している（写真8）。そのため作業部屋はこれらを集中的に行う3つのスペースに分けられている。ビーズ縫いのスペースには十数個のバケツにビーズがストックされ、作業機が2台置かれている。プリーツ付けのスペースには作業代が3台置かれている。チロリアンテープが詰められている棚のそばにはミシンが7台とロックミシンが1台置かれている。その他に布の裁断を行なう機が2台ある。工場に来たばかりの経験のない者はビーズ縫いからはじめる。経験を積みポストが空けばプリーツ付けに移る。さらに経験豊富で勤続年数の長い者が担当するのがミシンである。そのなかでも最も仕事を評価されている者は、2006年に3ヶ月間、昆明の学校に洋服の型紙の取り方を学びに行かせてもらい、それを活かして上着のパター

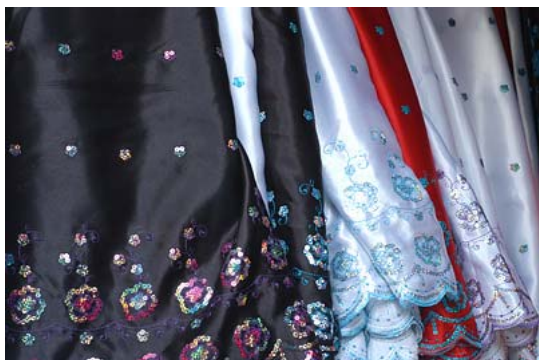


写真9 スパンコールのついたコシボ布



写真11 ロウケツ染め風のプリントが施されたモリク布



写真10 全体にミャオ族風の模様がプリントされたピーチスキン布

ンを取っている。それではここから工場での衣装製作の過程を述べる。

4.2.1 布の準備1(購入)

工場ではほとんどの布を文山の町の布地屋¹⁴⁾から購入する。スカート用にはカラフルな無地のナイロンやポリエステルなどのサテン、無地あるいはスパンコールでの刺繍が施されたコシボ布(高絲宝)(写真9)、全面にミャオ族風の模様がプリントされたピーチスキン布(水洗絨)(写真10)、苧麻と数種の化繊を混合した白色のモリク布¹⁵⁾(摩力克)、細かい格子模様が織り込まれた無地の白布(小格子)、モリク布や「小格子」布に藍色でロウケツ染め風の模様が施されているプリント布(印花布)(写真11)、織り目が粗くクロス・ステッチに適しているカラフルな無



写真12 カラフルなクロス・ステッチ用の布

地のクロス・ステッチ用布(挑花布)(写真12)、光沢のあるゴールド・プリント布(燙金布)といった多種多様な化繊布が使用される。上着には綿とポリエステルなど化学繊維との混合布、無地あるいはスパンコールが全面に貼り付けられたベロア、ベルベット、コードデュロイ、チャイナ・プロケードなどが使用される。エプロンや脚絆の土台となる布には、主にクロス・ステッチ用布が使用される。装飾用には、チロリアンテープや機械刺繍の布、ビーズが使用される。この仕入れの仕事は、LさんとCさんが行なう。



写真 13 シルク・スクリーンでプリントする



写真 15 ミシンの作業



写真 14 シルク・スクリーンの孔板



写真 16 スカート布にプリーツを付ける

4.2.2 布の準備 2 (シルク・スクリーン)

工場の設立当初は、工場の名前にもあるように「印染」つまりシルク・スクリーンによる染めが主流だったという（写真13、14）。シルク・スクリーンによる染めとは、ロウケツ染め風の模様がつけられた孔板¹⁶⁾を使用し、化学染料で型染めを行なうものであり、モン・スーのスカートのトー・ター（中段）の部分に使用される。一見したところ手描きのものと大差なく見え、従来家庭では手作業で描かれていた模様が、手軽に量産できる仕組みである。1990年代は一日100枚ほど染めたが、現在では常に行なっているわけではなく、1、2ヶ月に一度、数十枚製作す

る程度である。T氏とCさんの夫が担当することが多い。

4.2.3 布の裁断

スカートに使用する布は、予め購入時に店で6メートルの長さに裁断してもらう。それをスカートの丈の長さに合わせて裁断する。上着に使用する布は、サイズによって自作の型紙を合わせて裁断する。エプロン、脚絆などに使用する布も、それぞれの大きさに合わせて裁断する。

4.2.4 ミシンでの縫製

スカート用の布には、チロリアンテープなどの装飾品を何本か表面に縫いつける。上着、エプロン、脚絆、帽子用の布などもそれぞれ縫製する（写真15）。最近の上着にはファスナーが取り付けられたり、背中にタックがとられていたりするものもある。

4.2.5 スカートのプリーツ付け

装飾が施されたスカート用の布にプリーツを付ける（写真16）。まず布を手で持ち、布端に針を指しながら細かいひだを取っていく。そうやって一辺にプリーツを取り終わると、そのしつけ糸の両端を机の横に打ってある釘に巻きつけ、ぴんと張って布を机に固定する。そして指でプリーツを取りしつけ糸を通していく。布の種類にもよるが、サテンなどのやわらかい布の場合全体で3～4本のしつけ糸が付けられる。

4.2.6 スカートの仕上げ

プリーツを付け終わったスカート布に、シー・ターの布（腰部分）をミシンで縫い付ける。そしてシー・ター部分にプリーツを付ける。最後にスカートを結ぶ紐をミシンで縫い付ける。これらの作業が終わると保護用の綿布と一緒に巻いておく。そしてボイラで蒸してプリーツを完全に固定する。工場にはボイラが設置されており、連結されている蒸し器型の容器に巻いたスカートを20本ほど入れる。たいてい夜10時ごろから1時間ほど石炭がくべられ、強い蒸気によって蒸す。一晩そのまま放置しておき、翌朝しつけ糸を抜く。

4.2.7 ビーズ縫い

縫製されたそれぞれのパーツには、ビーズの飾りが縫い付けられる（写真17）。工員は各々が使用する数種類のビーズをボウルに入れ、ボウ



写真 17 ビーズ飾りを縫い付ける作業

ルから手でビーズを無造作にすくう。そして手の平のビーズから必要なものを順に針ですくっていく。ひと針につき、小さなビーズを5～10個、円やハート、蝶などをかたどったメタリックな飾りビーズを1～3個、順にとって長さ3～5センチの飾りをつくる。上着には、襟の部分、袖の部分につけられる。スカートには上下に2～3段、これらの飾りがつけられる。時にはハートやダイヤなどの形をかたどるように付けられることもある。エプロン、脚絆、腰帯、帽子にもそれぞれ隙間なくビーズ飾りが施される。

4.2.8 飾りつけ

そのほかに、アイロンや接着剤で、ワッペンなどを貼り付けることもある。

4.3 素材・デザイン・色・装い方

それではここで、既製服となった民族衣装の色やデザイン、そして装い方が、どのように変化しているのかを、素材の移り変わりとともに明らかにしていく。

工場では1990年代は、前述したようにシルク・スクリーンによる染めを主に行っていた。つまり当時は、まだシー・ター、トー・ター、タン・ターと3つの部分に分かれたスカートを製作しており、素材こそ綿布やモリク布を使用していたも、従来のスタイルや色を踏襲していたのである。

その後、2003年から2004年にかけて、「小格子」布やミャオ族風プリントの布（印花布）、ピーチスキン布（水洗絨）などが、2006年にはスパンコールが縫い付けられたコシボ布（高絲宝）が市場に登場した。そしてそのころから色に流行が生まれるようになった。それまで刺繍糸やチロリアンテープなどに多用されてきた赤系の色が消え、2004年ごろからケミカルな水色を基調とした色が流行しはじめた。同時に、衣装一式の色合いを統一することが好まれるようになってきた。2006年には白色の衣装が流行し、結婚式にはタプーだった白色の衣装が、若者の花嫁



写真 18 襟が立てられている上着

衣装として好んで着用されるようになった。2007年には逆に赤や紫といった濃い色が流行し、2009年の最もおしゃれな若者は茶色の衣装を着用していた。

布地の多様さと並行して、チロリアンテープやビーズといった装飾品も華美になってきている。プラスチック・ビーズが出回り始めたのが1995年ごろで、1999年ごろからサイズの小さいビーズが出回り始めた。工場では2005年から光沢があり色合いの豊富なガラス・ビーズを使用しはじめた。最近ではハートや蝶などをかたどったメタリックなパーツも豊富になってきている。

素材が多様に色とりどりになるにつれ、デザインも従来の型に当てはまらなくなっている。スカートにみられる顕著な変化は、トー・ターとタン・ターの区別がなくなったことである。それぞれロウケツ染めと刺繍が施されていた部分だが、既製服化の過程でどちらも省かれたため、それらを分ける必要がなくなり、1枚の布ですむようになった。上着にみられる大きな変化は、前身ごろの形と襟である。従来は前身ごろが右開きの形であったが、現在はスモック型のもの、襟元がしずく形に開いているもの、襟が立ててあるもの（写真18）など、様々になっている。

既製服化の発展と、それを支える素材の変化によって、それ以前は比較的固定されていたデザインや色が、大きく変化している。それによっ

て毎年のように色に流行が生まれるなど、変化の速度が増している。そして、このような変化は晴れ着と日常着の差を拡大させている。汗を吸わない化繊布にビーズの装飾が隙間なく縫い付けられた衣装が、農作業などの労働に不向きなのは明らかである。既製の民族衣装を好む若年層の生活環境の変化もあり¹⁷⁾、既製の民族衣装は旧正月や花山節、結婚式などの場で晴れ着の意味合いをより効果的に強調するようになった。つまり、晴れ着と日常着の違いは、単に新旧の差ではなく、流行の先端をいく華やかなデザイン重視の衣装かどうかになっているのである。

J民族印染工場のT氏に、次々と新しいデザインの衣装を製作する必要性についてたずねると、「みな人と違うもの、より最先端のものを着たいと思っている。でも今日うちで作ったものが、明日には競業者に真似される。だから次々と新しいものを作る必要がある」と語る。

5. 「伝統的」民族衣装と既製の民族衣装の比較

以上、従来の農村における民族衣装と、既製服となった民族衣装について製作方法、デザインや色、装い方についてみてきた。ここで、それらを比較して、その変化の様相を明らかにしたい。

まず製作に関してみていく。農村で行なう場合には、すべての工程を基本的に1人で行なう。それに対し、工場では作業がビーズ縫い、プリーツ付け、ミシンという3つに大別されているほか、布の購入やシルク・スクリーン、プリーツを付けたあとの蒸す作業などには、適宜LさんやCさん、あるいはT氏などが加わるように、分業が図られている。そして染織、刺繍などの工程が、工場での製作では省かれるようになった。逆に農村にはみられないが、工場で新たに加えられた作業に、ビーズ縫いがあげられる。

デザインや色は、従来は比較的固定されており細かい部分に作り手の意匠がみられるだけで

あったが、工場では素材に多種多様な化繊布や装飾品を使用することによって、流行を生み出し、そしてそれを意識したものを製作している。

そしてハレの日と日常の衣装についてみると、これまでは新しいか古いかが区別の基準となっていた。つまり旧正月に合わせて新調される衣装はしばらくの間、晴れ着や余所行き着として着用され、年月とともに次第に労働着へと降格されたのである。それに対し、既製の衣装は、晴れ着としてのみ着用される傾向が強い。華美な装飾が施された衣装は労働着として着まわすことを前提にしていないうえに、流行があるため長く着続けることができない。

従来は、民族衣装を製作する技術が女性の嫁としての価値の判断材料になっていたため、他人との衣装の差を、技法の丁寧さ、刺繍のきれいさ、プリーツの細かさなどに表現してきたが、既製の民族衣装が普及するにしたがい他人との差別化が「より華やかでより流行の先端に行くもの」に移行してきているといえる。

このようにミャオ族の衣装は、既製服化することで、これまでにない目まぐるしい変化にさらされるようになってきたのである。

6. 既製の民族衣装の流通

それでは既製の民族衣装はどのように販売され、どこに流通しているのだろうか。文山での販売形態には、卸販売、小売販売、オーダーメイドがみられ、それぞれ店舗や定期市の露店での対面販売、郵送による通信販売などに分けられる。流通先は地元から、前述したように国外に居住するモンにまで広がっている。

J民族印染工場は、店舗を持っておらず、卸販売を主としていた。また時おり直接工場を訪れる近隣の住人からオーダーメイドも受け付けている。工場は国内より国外のモンへの販売を主としてきており、ラオスやベトナムなど周辺国のモン居住地域にも販路を広げていった。地元ミャオ族の行商人がおり、西双版纳傣族自治

州勐腊県から国境を通りラオスへ衣装を運んでいたという。ラオスへは1998、1999年ごろが最も売れていた。ラオスを経由してタイにも販売していたが、タイのモンは「勤労で刺繍もうまい」ので、あまり売れなかったという。貴州省のミャオ族にも販売していたが、貴州省のミャオ族はモンではなく、衣装も大きく異なるので、これも大きな販路にはならなかった。

ここではJ民族印染工場に加え、個人経営者の事例も挙げながら、アメリカへの販路拡大の様子と、地元文山での販売の様子を明らかにしていく。

6.1 アメリカのモンとの出会い

冒頭でも述べたが、アメリカをはじめとする中国以外の国に居住する蒙のあいだに、文山で生産された衣装が流通している。アメリカのような、これまでの生活とかけ離れた社会に身をおいて、ラオスで暮らしていた時のように染織を行なうことは現実的ではなく、また蒙の衣装を日常的に着ることは移民先の社会ではしばしばトラブルの原因となる。そこで年に一度、新年の祭りの際に彼らは蒙の衣装を着用することでモンとしてのアイデンティティを保っているのである。その際に中国、特に精神的故郷であり、同じモンである文山のミャオ族が製作した衣装が好まれて着用されているのである。

J民族印染工場にアメリカのモンがきたのは1998年ごろであった。Lさんによると、地元政府の人が、同じ蒙の文化を紹介する目的で連れてきたのだという。工場で衣装製作が行なわれていることを知った彼らが帰国した後、商才のある人たちから連絡があり2002年にアメリカのモンとの取り引きがはじまった。2002年から2003年にかけて最も売れ¹⁸⁾、現在も7、8人のアメリカのモンと取引をしている¹⁹⁾。アメリカに販売するほうが、地元で売るよりも利益率がよい。現在ではラオスやベトナム、貴州省への販売はほとんど行なっておらず、アメリカが主た

る取引先になっている。

工場の販路を広げ、事業を拡大した契機となったアメリカのモンとの出会いであったが、彼らはどのように文山に来たのだろうか。文山州の国外との交流は、1990年まで国境を接しているベトナムが主であった〔文山壮族苗族自治州地方誌編纂委員会2001: 282-283〕が、1991年以降、日本、タイ、アメリカ、オーストラリア、フランス、ドイツなどが学術調査、貧困状況や国境貿易などの視察、金鉱調査などを目的に訪問をしている〔ibid.: 283〕。そのようななか、アメリカのモンとの交流も深まっていった。『文山苗族』から明らかになるアメリカのモンとの交流は以下のとおりである〔文山壮族苗族自治州苗学発展研究会2008: 365-366〕。

1991年7月

文山州のミャオ族学者5名が、貴州省で開催された貴州省苗学研究会に参加し、そのときアメリカから参加していたモン7名が初めて文山を訪れる。これが欧米のモンが文山へのルーツ探しと同胞訪問を開始する契機となった。

1992年

国務院により文山州の8県が対外開放され、アメリカ、フランス、オーストラリア、カナダなどから文山を訪問する蒙の数が年々増加した。

1992年8月

ミネソタ州ミネアポリスの「苗人伝統文化協会」の招聘により、雲南省政協副主席の項朝宗を団長とした雲南ミャオ族民間芸術団が組織され初めて訪米した。

1993年4月

文山州で初回文山国際三七²⁰⁾ 節が行なわれたのに合わせて、アメリカ、ドイツなどのモンが次々とルーツ探しと同胞訪問に来た。

1993年9月

ミネソタ州「苗族協会」の会長の招聘により、文山州の王正光を団長とする雲南ミャオ族芸

術団の一行14人が、ミネソタ州体育館、ミネソタ州大学、カリフォルニア体育館などで公演を行なった。

1994年

文山民族師範学校副校長の楊紹祥を団長とした雲南ミャオ族民間芸術団の一行13人がアメリカで3回目の公演を行なう。

1995年旧正月

文山州政協副主席の呉成元の働きかけで、アメリカのモンが文山県徳厚郷の花山節開催に賛同し、アメリカから50人あまりのモンが花山節に来た。

1996年

州政協副主席の陶華貴を団長とする雲南ミャオ族民間芸術団が4回目のアメリカ公演を行う。

このようにアメリカのモンは1991年に初めて文山を訪れ、それ以降互いに公式の訪問を繰り返してきことが分かる。それに伴い、個人レベルでの訪問も次第に増加してきた。このような時勢にのり、個人経営者のなかにも国外のモンに販売している者が多くいる。むしろ前述したJ民族印染工場よりも、個人のほうがより早期からアメリカのモンとの関係を結んでいた。彼女たちがどのようにアメリカとの繋がりを持ち販売していたのか、ここで二人の女性の事例をあげながらアメリカのモンとの関係を詳細にみていく。

【事例1 Zさん】

Zさんは文山の町に住む30代のミャオ族女性である。現在は子育ての傍ら、欧米のモンから連絡があれば、文山を個人的に訪れる彼らの案内や世話をしている。馬関県の農村出身で、14歳のころから自宅での衣装製作と販売を始めており、1993年ごろ文山に来た。文山に来た後の彼女の販売先はアメリカが主であったが、そのきっかけをつくったのは姉である。Zさんの姉

は、1991年に文山でミャオ語の読み書きを習っていた。もともと無文字であるミャオ族には、現在でもミャオ語の読み書きができる者は多くない。Zさんの姉はミャオ語の識字の能力によって、1992年に文山州政府が文化交流の名のもとアメリカ訪問を計画したとき、その一行に加わることになったのである。当時の同行者は政府関係者など5名だったという。姉の帰国後、Zさんは姉のつくってきたつてをもとに、カリフォルニアのモンと取引をすることになった。

商売を始めた当初は順調だった。そのころは出来の拙いものでも、一式（スカート、上着、前掛け、脚絆、帽子）250～300ドルで売れたという。アメリカのモンの好む衣装は文山のものと異なる。新年のパーティなどで晴れ着として着用するため、踊る際に映えるような光沢のある上着が好まれたという。特に1994年ごろ以降、サテン地の黒や緑色のものが増えた。しかし文山でも同業者が増加し、飽和状態になったため、次第に商売は下り坂になっていった。値段も一式で60ドルほどに下がったため、Zさんは1996年に商売から手を引いた。

【事例2 Yさん】

Yさんは文山の町に住む30代のミャオ族女性である。Yさんの夫はミャオ語の教師をしており、Yさん自身は地元ラジオ局においてミャオ語と漢語の翻訳の仕事をしている。その合間の休日や平日の夜などに、自宅で衣装を製作し、アメリカに販売している。部屋の片隅には布や製作した衣装が山積みになっていた。

Yさんは、1991年から商売を始めた。当初は貴州省のミャオ族に販売していたという。しかし貴州省のミャオ族は自身で着用するわけではなく、刺繍の技術や模様を参考にするために購入するので、大きな収入にはならなかった。その後1993年からアメリカに販売を始めた。Yさんの場合は、最初のころは友人を通じてアメリカへ売っていたという。そうするうちに、当時

昆明で学校に通っていたYさんの妹が、インターネットを通じてアメリカのモン男性と知り合い、2000年にアメリカに嫁ぐこととなった。それがYさんにとってアメリカへの販路を広げるきっかけとなった。Yさんの妹は衣装販売に直接携わっているわけではないが、アメリカの周囲のモンの人々からの注文をYさんに伝えているのである。

このようにZさんはアメリカを訪問した姉、Yさんはアメリカのモンに嫁いだ妹を介してアメリカへと販路を広げた。以上J民族印染工場、およびZさんとYさんの事例から明らかになることは、アメリカのモンとの繋がり、知り合いや友人、家族といった個人的なつながりによってなっていることである。つまり、専門の仲介業者などは存在しないし、インターネットなどを通じて大規模に行なわれているわけでもない。あくまでルーツやアイデンティティを共有する「顔の見える」相手との取り引きであり、それは個人の裁量によるものである。

6.2 地元文山での需要の高まり

しかし、アメリカのモンだけが流通先ではない。地元からの需要も決して軽視できないどころか、ますます高まりをみせている。国外への卸販売を主としていたJ民族印染工場も、2004年から文山の定期市に露店を出しはじめた。文山の町に定期市がたつ毎週日曜日、CさんやT氏の妻が中心となって、早朝から店を出しに行く。テントと露台を組み立て、Cさんの夫がオートバイで運んできた商品を並べ、午前9時ごろから午後3時まで地元客を相手に販売を行なう。2008年には文山の町に店舗を借り、本格的に地元での販売に従事するようになった。店舗には人が常駐しているわけではないので、週に半分ほどしか開店しないが、工場では主たる販売先をアメリカとしつつも、地元ミャオ族の購買力も決して無視していない。

実は個人経営者には、前述のZさんやYさんのようにアメリカのモンに販売している者よりも、彼らと繋がりを持たない者のほうが多い。ここでアメリカのモンとの繋がりを持たない者の事例を紹介することで、地元文山での販売の様子をみてみる。

【事例3 Mさん】

Mさんと最初に出会ったのは、定期市であった。そのころ毎日のように定期市巡りをしていた筆者は、ミャオ族衣装の販売をしている人たちがだいたい同じ顔ぶれだということに気づいた。そのうちの一人がMさんである。知り合った当初、Mさんは自宅で衣装を製作し、それを持って各地の定期市に出向いていた。

33歳のMさんは農村の出身である。18歳で結婚し、25歳である2001年からこの商売を始めた。商売を始めたころは、布の種類も少なく、手作業が多かったので大変だったという。さらに毎日異なる定期市に出かけるのは体力的な負担が大きい上、売り上げも上がらないため、2008年に文山の町に念願の店舗を持った。

Mさんの店は、定期市の日にはミャオ族衣装を販売する露店が立ち並び通りにあり、衣装を買いにきたミャオ族の人々の目にとまりやすいという意味で一等地にある。彼女は定期市の日だけでなく、ほぼ毎日店を開けている。店内にはミシンとロックミシンを置き、ミャオ族の少女を1人雇って、製作と販売を並行して行なっている。地元のミャオ族が主たる客であり、時には行商人らしき人が卸値で大量に購入していくこともある。販路は文山州8県に及んでいるというが、アメリカには販売していない。その理由をMさんは、アメリカには親戚も知人もいなく、つてがないからだと説明する。もしつてがあればアメリカにも販売をしたいと思っているが、積極的につてをつくらうとしているわけではない。

Mさんは上述のZさんとYさんよりも遅い時期

に商売を始めているため、ミャオ族衣装の既製服化がかなりすすんだ時点でこの商売に参入したといえる。また、アメリカとの取引も行なっていない。しかし、アメリカへの販売からすでに手を引いたZさんや、最初から副業として行なっていたYさんとは異なり、地元に着実に商売を営んでいる。

ミャオ族の衣装が最も売れるのは、農閑期にあたり人々が新しい衣装を準備し始める10月から旧正月の間である。筆者の観察では文山県の定期市において出店していた店の数は次のとおりである。

・2007年2月11日（旧暦12月24日）

露店61店（店舗は未集計）。旧正月直前のため、通りは人で溢れていた。

・2008年6月22日（旧暦5月19日）

露店12店、店舗5店。農繁期なので買い物客の姿はほとんどなく閑散としていた。

・2009年1月18日（旧暦12月23日）

露店51店、店舗16店。

農繁期でもいくつかの店が並んでいるが、農閑期の旧正月前になると数多くの店が立ち並び、通りは地元の買い物客でごったがえす。このような露店や店舗の出現期やその増減の詳細は明らかでないが、少なくとも筆者の観察では2005年当時は常設の店舗はほとんどみられなかったし、人々の話からも特にここ数年で店舗も露店も大きく増加したことが推測される。Mさんのように地元で商売に従事する人は年々増加しており、それだけ地元での需要が増えていることがうかがえる。

7. 既製の民族衣装をどう着るか—機能性と価値観から

以上、生産者の視点からミャオ族衣装の既製服化の進展と流通についてみてきた。そこでここでは消費者、つまり地元文山での着用者が、

既製服となったミャオ族衣装をいかに受け入れているのかをみていきたい。農村では現在でも衣装は手作りすることが主流だが、主要な商品作物である三七ニンジンの栽培時期がこれまで衣装製作を集中的に行なってきた旧正月時期にあたるため、衣装製作に時間が以前ほど割けなくなったり、またそのおかげで現金収入が増加していることもあり、新年のために準備する衣装の一部に既製の民族衣装を取り入れる人が増えている。

農村においてミャオ族女性が何を着用しているのかは、世代によって差異がある。老年層ほど全身にミャオ族衣装を着用している割合が高く、若年層で町との接点が多い者ほど洋服（漢族の服を意味するチャオ・スア（chaot Shuad）と呼ばれる）を取り入れる傾向にある。しかし、洋服を取り入れるのは上半身からであり、ミャオ族のスカートは着用され続けていることが多い。そのことは、上半身は洋服（Tシャツ、ブラウスなど）を、下半身にはミャオ族の衣装（スカート、前掛け、腰帯、脚絆）を着用している姿は多く見られるのに対し、逆の組み合わせ、つまり上半身にミャオ族衣装、下半身に洋服という姿は全くみられないことから分かる。つまり洋服との組み合わせの過程で、ミャオ族の衣装として最も象徴的な部分として残るのがスカートなのである。

そもそもミャオ族はなぜスカートに5～6メートルもの長さの布を使用しているのだろうか。ミャオ族は移動を繰り返しながら、山間部に居住してきたため耕地に恵まれてきたとはいえず、厳しい生活を送ってきた。余裕があるとはいえない暮らしのなかで、長い布を織り、ロウケツ染めや刺繍を施し、プリーツを付けるというのは多大な労力を要してきたと想像できる。一方で洋服は定期市で安価に販売されている。洋服を買えば、民族衣装を自作する手間も必要ない。しかしなぜスカートを作るのに短い布ですませたり、洋服にすぐに移行したりしないのかと考

えると、その理由は、彼女たちの普段の暮らしのなかにおける動作からうかがい知ることができる。つまり長い布にプリーツを付けたスカートこそ、農村でのミャオ族の生活に密着しているのである。

農村のミャオ族女性は、一日中ほとんど休息することなく働いている。起床したらまず家族の洗顔用にかまどに薪をくべて湯を沸かす。そして朝食をつくり、ブタやウシなどに飼料をやり、昼食をもって畑へと出かける。農作業から戻ってくると夕食の準備と後片付けをし、家畜に飼料を与え、夜は刺繍などに勤しむ。畑に出ない日は収穫した農作物の仕分けや洗濯などの作業をしており、なにかすればたばこで一服し、隙があればテレビを見ている男性に比べ、常に忙しく動き回っている。

女性ならタイトスカートをはいたときの足さばきの悪さは容易に想像できるだろう。それだけでなく、かがんだり、しゃがんだり、斜面を登っ



写真 19 前かがみで作業をする女性



写真 20 スカートをたくし込んで座る女性

たりといった動作も制限されてしまう。それに対しプリーツが付けられたボリュームのあるスカートなら、多少前かがみになっても中があらわになることはない（写真19）。ミャオ族が日常的に用いている低い腰掛けに腰をおろしたり、地面に足を広げて座することもできる（写真20）。スカートの端をつまみあげて顔の汗を拭くこともできるし、身体に沿うプリーツのおかげで梯子を昇り降りするのにも支障はない。つまり普段の農作業や労働を行なう際に、非常に動きやすい形をしているといえる。衣服を替えると、身ぶりや姿勢、ふるまいの型といったものも変わる〔鷺田2004: 37〕が、彼女たちの日々の暮らしのなかの動作は、まだスカートをはくことを必要としているのである。

彼女たちが特に重視するのが、はき心地を左右するスカートのプリーツである。一枚のスカートには約220～300のプリーツが付けられる。スカートのシー・ター（腰部分）とトー・ター（中段の部分）の間に、プリーツの数がその2倍になっている部分が5センチ丈ほどとられている。この細かい部分（raik ndret）にはしつけ糸がつけられたままになっており、女性たちはスカートを腰に巻いた後、この細かいプリーツ部分を指で左右に動かすように調節して身体に密着させはき心地をよくしている。

このように生活に密着し、自分ではき心地を調節することのできるスカートであるが、前述したようにその製作は重労働である。それだけでなく、麻製のスカートは重い。重量があると洗濯を行なうのも大変である。スカートははきたいが、重労働からは解放されたい、そのような彼女たちの思いが、労働の手間を省くことができ、洗濯も着用も楽な軽量の化繊布に移り行くのは自然であり、そのことが地元の女性たちに既製の衣装が受け入れられてきた理由のひとつだといえる。

またそのような日常生活から要求されるスカートの機能性以外にも、ミャオ族の衣装が重



写真21 ター・リャン・ズ・ドウの上着

視される状況がいくつかあげられる。まず結婚式である。結婚式では、衣装について特に規定のない新郎に対して²¹⁾、新婦は必ずミャオ族の衣装を着用しなければならないという通念がある。ある老人は、知り合いの新婦がミャオ族衣装を着用せずに結婚式をあげたため、後に病気になり、結婚式をやり直したことがあることを語ってくれた。例え新婦がミャオ族以外だとしても、ミャオ族に嫁ぐ場合には必ずミャオ族の衣装を着用しなければならない。結婚式において新婦は、実母と義母の2人から贈られた衣装を着用するが、そのうち義母から贈られたミャオ族衣装を着用して婚家に入ることにより、その家の者になったと見なされるのである。

また、長寿を願うために老人が着用するための上着も存在する。背中部分に十字や星型などの形をした当て布が縫い付けられている上着を着用している老人をしばしばみかける（写真21）。これはター・リャン・ズ・ドウ（tab liangx nzid ndeud）と呼ばれるものである。生まれてくるときに、この世に持ってくるべき食糧やお金が足りなかったために老衰していると認められた者が、その配偶者とともに行なうものであり、「空

になった碗に食べ物を継ぎ足す」ことを目的とする。シャーマンの同席のもと、子供や孫がスプーンに飯と肉をのせ、それを老夫婦に食べさせる儀礼を行なう。そして手持ちの上着のなかから適当なものを選び、ター・リャン・ズ・ドウの上着とする。老夫婦の嫁か娘が、その上着の背中に男性用には9粒、女性用には7粒の米粒を入れて当て布を縫う。もとは長寿を願うものだが、それが転じて病気の治癒を願う意味がこめられることもある。ある女性は、自分の義両親がター・リャン・ズ・ドウを行なった理由を、義母が病気をしたが近くの病院では原因が分からず、遠くの町の病院に行く金銭的余裕がなかったためだと語ってくれた。義母の病気はその後ゆるやかによくなったという²²⁾。

このようにミャオ族は、時に衣装に着用以上の役割を与え、活用している。とりわけ結婚式では、若い新婦に華やかで流行の既製の衣装が好まれるように、このような状況で利用される衣装は、必ずしも「伝統的」である必要はない。

既製の民族衣装は、農村に暮らすミャオ族の生活のなかに、機能性からの要求の面でも、ミャオ族としての価値観がこめられる対象としての面でも、大きな摩擦や葛藤を起こすこともなく、受け入れられているのである。

8. おわりに一変化したものとしていないもの

本稿では文山におけるミャオ族の民族衣装の変化について、既製服化に焦点をあてて述べてきた。文山では1990年代前半からすでにミャオ族衣装の既製服化の気運があった。それを促進させたのが、アメリカのモンによる購買力の増進であった。ただアメリカのモンによる需要がすべてではなく、文山では地元のミャオ族によるニーズも増していることを指摘した。

既製服化に伴い、まず製作方法が変化した。農村においては家庭の女性によって手作業で行なわれていた作業が、服飾工場や個人経営の店舗では分業され、効率的かつ合理的に製作され

るようになった。そして、既存の化繊布や装飾品の使用が顕著になるに従い、デザインや色に流行がみられるようになり、その移り変わりの速度が増した。さらに、流行に敏感な若者にとっては晴れ着の意味合いが強まり、老年層と若年層で着こなし方の相違が大きくなってきた。既製服化により、表面的な見た目、着心地、装い方が変化したのである。

また、ミャオ族の衣装は確かに既製服化して国境を越えて流通しているが、その生産は大規模工業生産と個人的製作のあいだにあり、個人の裁量によりながら「大量」に生産されているものだといえる。またその対象となる消費者は、たとえ国境を越えて居住してはいてもルーツとアイデンティティを共有しており、また個人的な繋がりに基づいた「顔のみえる」相手だといえる。そしてこのような一般的な既製服の概念に集約されない部分こそ、ミャオ族衣装の既製服化の特徴だといえる。

しかし、既製服化という急速な変化を経ても、それらが「ミャオ族の衣装」であることには変わらない。地元のミャオ族以外の人々が見ても「ミャオ族の衣装」であると判断されるし、ミャオ族自身もそれが「ミャオ族の衣装」であるという認識に揺らぎは持っていない。それを「ミャオ族の衣装」たらしめている理由は、ミャオ族自身がミャオ族の衣装として日常生活のなかで着用し継承し続けているという事実から考察することができる。どれほど模様や色、そして素材が変化しても、例えばプリーツの付けられたスカートの形や、それに組み合わせる前掛けの役割と形は保たれたままである。ここにはスカートが彼女たちの日常生活に沿っているという機能性があげられる。またそれらの衣装には、ミャオ族としての価値観が埋め込まれ、例えば結婚式の花嫁衣装や、衰弱した老人が着る上着などにみられるように、着用以上の役割が与えられているのである。

そして最大の特徴は、ほかならぬミャオ族自

身がこのような変化を自然に受け止めていることである。彼女たちは、従来の麻の栽培からはじまる染織や刺繍の手間から解放されたことを喜び、また毎年新しく生み出される流行に新鮮さを感じている。同時に、古い衣装はどんどんとボロにされ捨てられる。「伝統的」な衣装を重視していないのと同時に、既製の民族衣装も特別視していない。もともと異なる衣装を着用するサブ・グループ間で婚姻を繰り返すことで、娘時代に母親から受け継いできた衣装と、婚家で新しく接する衣装に柔軟に対応し、そのときどきでよいもの、着用しやすいものを取り入れてきた。自分たちで選択し変化させることは今にはじまったことではないのである。そのため、既製服化はこの10年ほどで急激に押し寄せてきた転換に違いないが、その変化は彼女たちにとって断絶ではなく、これまでどおりの延長線上にあるのではないだろうか。彼女たちはただミャオ族としてのミャオ族の衣装を着用し続けているだけなのである。

注

- 1) 特定の民族や地域に固有の衣装を指す言葉は、民族衣装、民族服、エスニック・ドレス、エスニック・コスチューム、トラディショナル・コスチューム、フォーク・コスチュームなど数多く存在するが、それぞれの定義は曖昧である。アイヒャーは、エスニシティを時と空間によって可変性を持つものとし、エスニック・ドレスとはそのようなエスニシティと関連づけられ、例えば旅行者の要求によって特定の過去に固定されるようなものではなく、常に時空間によって変化するものとしている [Eicher 1995: 4]。本稿では、アイヒャーの定義を援用して、「民族衣装」あるいは「衣装」という用語を使用する。
- 2) 文山地域の定期市は、鎮レベルの町に曜日ごと（7日に1度）にたつ。
- 3) ミャオ語の表記は、『苗漢英学習実用手冊』による。同書で紹介されているのは、川黔滇方言の川黔滇次方言であり、モン・ジュアの音成分が多い [熊・戴2005: 1]。この表記法では、「母音+子音+声調」となっており「モン」の綴り

「hmongb」の場合、「hm」が母音、「ong」が子音、「b」が声調である。同書に掲載されていない単語の表記法は、筆者の知り合いで文山ラジオ局においてミャオ語放送を担当していたミャオ族男性に教えていただいた。なお、ミャオ／モン語の表記のされ方は方言によって少しずつ異なる。例えば「モン」の表記は、黔東方言をもとに編纂された『苗漢詞典 黔東方言』では「hmub [張1990: 211]」、滇東北次方言をもとに編纂された『苗語理論基礎』では「ad hmaob [王2005: 170]」、中国以外の国の方言を参考に編纂したという『苗漢詞典』では「hmoob [潘1993: 79]」となっている。

- 4) 中国語で「平繡」と呼ばれる技法で、刺繍面を塗りつぶすように刺繍糸を並行にわたしていく。
- 5) ミャオ族は両腕を左右に伸ばした全長を「ドゥラン (dlangx)」で表し、1枚のスカートに、3～4ドゥランの布を使用する。これが5～6メートルに相当する。
- 6) 中国語で「挑花」と呼ばれる技法で、布の織り目にしたがって糸を十字に刺していく。技法は単純だが、布地に隙間なく刺繍を施すためとても細かい。
- 7) 男性は1980年代から洋服を着用しており、現在では民族衣装はほとんど着用されていない。
- 8) 文山地域のミャオ族にとって最大の祭り。旧正月3日目から7～12日間ほど行なわれる（地域によって開催日数は異なる）。歌垣や、闘牛、闘鶏などが行なわれ、最近では若者によるダンスパフォーマンスも行なわれており、軽食や雑貨を売る屋台が軒を連ねている。若者にとっては結婚相手をみつける場となっている。
- 9) 経糸が180本のものは、4（ブロウ）・ドル・2（アオ）(bloub ndruk aob)、200本のものは、5（ジー）・ドル (zhib ndruk) と呼ばれる。ドルは40本の糸を数える単位である。つまり4・ドル・2は4つのドル（4×40）に、20本を足すという意味で180本、5・ドルは5つのドル（5×40）という意味で200本となる。
- 10) 1980年代以降、製作工程の一部を町の合作社に委託することもあった。例えば麻布を化学染料で藍色に染色したり、上着のミシン縫製を任せていた。1979年当時、文山県には裁縫（ミシン）と編織りの合作社が6社、染織の合作社が1社あった [文山県誌編纂委員会1999: 228]。
- 11) 中国の行政区画は省級（省、直轄市）、地級（自治州、地級市、市轄区）、県級（県、自治県、県級市）、郷級（郷、民族郷、鎮）の4つのレベル

に分けられる。村公所は郷級の下におかれていくいくつかの農村を取りまとめる行政単位である。

- 12) 1989年11月16日に江沢民が文山を訪問した目的は、辺境地域である文山の軍人や人民を慰問するためだった[中国服装網]。T氏をはじめとする一般の人々は、当日本人を目にするまで、江沢民の訪問を知らなかったので、非常に驚いたという。
- 13) 工場は、文山ラジオ局に勤めているミャオ族男性との共同経営である。工場長とこの男性に血縁関係はないが、「姓が同じだから」協力してはじめたという。設立の際には知り合いの企業社長から借金をした。この男性とその妻（同じく文山ラジオ局に勤務のミャオ族）も経営管理の一旦を担っており、毎月給与をもらっている。
- 14) 文山の中心の町には、4、5店のミャオ族衣装用の布地屋がある。様々な布地のほか、チロリアンテープ、ビーズ、レースなどを扱っている。店主は漢族が多い。
- 15) 「摩力克」とは、広西絹麻紡績研究所が開発した苧麻とポリエステルやニトリルなどの数種類の化学繊維を混合させた布で、ミャオ族の服飾用の布として作られた[阿里巴巴]。
- 16) 文山に住むあるミャオ族男性が、1980年代にはじめてミャオ族用のシルク・スクリーンの孔板を作ったという。工場でも当初それを使っていたが、値段が高かったのでそのうち自作するようになったという。
- 17) 2000年以降、教育と出稼ぎの機会が増えたことにより、村を出て町で暮らす若者が増えている。生徒がミャオ族だけの村内にある小学校はともかく、他の民族の同級生たちと寄宿生活を送る村外の中学校で、ミャオ族の衣装を着用する者はいない。それは広州などの都会に出稼ぎに行く若者も同様である。
- 18) 工場の展示室に掲示されているパネルには、「2002年に生産量が著しく増加したため県政府から「先進个体戸（先進的な個人経営者）」に選ばれた」とある。また「2004年にはアメリカに800セットの衣装を販売し、その売り上げは60万円になった」とある。
- 19) アメリカからの注文は電話で受ける。モン同士なので多少方言によるイントネーションの違いがあっても言葉は分かるという。販売は郵送で行なっており、納入期日が迫るといくつものダンボールに注文の衣装をつめ、郵便局へ運んでいる姿をみかける。支払いは銀行へ振込みさ

れる。

- 20) 学名 *Panax notoginseng* Berk.。ウコギ科の薬用植物。雲南省や広西壮族自治区の海拔1200～1800メートルの地域で栽培される。止血作用や活血（血液循環の改善）作用がある。別名「田七」「金不换（金に替えられないほど価値が高い）」。
- 21) 近年では結婚式用に準備したスーツを着用する新郎が多い。
- 22) 儀礼が終わったあとも、ター・リャン・ズ・ドウの上着は日常的に着用される。

参考文献

程志方・李安泰主編

2000 『雲南民族服飾』雲南民族出版社。

Eicher, Joanne B. (ed.)

1995 *Dress and Ethnicity: Change Across Space and Time*, Berg.

今堀恵美

2006 「市場経済におけるカシュタチ（刺繍屋）事業の誕生—ウズベキスタン・ショーフィルコーン地区の事例から—」東京都立大学社会人類学会編『社会人類学年報』弘文堂、Vol. 32、pp. 57–84。

鍛島康子

1980 「既制服の歴史（その1） 初期段階アメリカ男子服の形態を中心として」実践女子大学編『実践女子大学家政学部紀要』、Vol. 17、pp. 109–116。

1981 「既制服の歴史（その2） ミシン導入後の紳士服の大量生産体制について」実践女子大学編『実践女子大学家政学部紀要』、Vol. 18、pp. 87–94。

Lynch, Annette

1999 *Dress, Gender and Cultural Change: Asian American and African American Rites of Passage*, Berg.

中谷文美

2007 「「わたしの布は誰のもの？」—インドネシア伝統染織の〈ファッション化〉をめぐる—」東京都立大学社会人類学会（編）『社会人類学年報』弘文堂、Vol. 33、pp. 1–32。

潘征峰

1993 『苗漢詞典』雲南人民出版社。

Phan, Thanh and Ikemoto, Yukio

2008 “Ethnic Minority People and Tourism in Vietnam: The Traditional Textile in Binh

- Thuan Province, *Memoirs of Institute of Humanities, Human and Social Sciences*, Ritsumeikan University, No. 91, pp. 67–97.
- Polhemus, Ted and Proctor, Lynn
1978 *Fashion & Anti-fashion: an anthropology of clothing & adornment*. Cox and Wyman.
- Schein, Louisa
2004 Hmong/Miao Transnationality: Identity beyond Culutre in Tapp, N., Michaud, J., Culas, C. and Lee, G (ed.) *Hmong/Miao in Asia*, Silkworm Books, pp. 273–294.
- 関本照夫
2000 「周縁化される伝統—バティックから見るジャワの近代」『民族学研究』65-3、pp. 268–284。
2003 「市場とコミュニティー—ジャワ・バティックとその社会的土台」東京大学東洋文化研究所編『アジア学の将来像』財団法人東京大学出版会、pp. 457–484。
- 杉本星子
2009 『サリー！サリー！サリー！—インド・ファッションをフィールドワーク（京都文教大学文化人類学ブックレットNo. 2）』風響社。
- 田口理恵・宮脇千絵
2008 「身体・衣・環境—スカートから見た生態史—」秋道智彌編『くらしと身体の生態史（論集 モンスーンアジアの生態史—地域と地球をつなぐ—3）』弘文堂、pp. 147–164。
- 王維陽
2005 『苗語理論基礎』雲南民族出版社。
- 鷺田清一
2004 「〈民族〉と〈モード〉」民族藝術学会編『民族藝術』、Vol. 20、pp. 36–40。
- ウォーターベリー、ロナルド
1995 「旅行者のための刺繍—メキシコ・オアハカにおける現代のプッティングアウトシステム」ワイナー・A、シュナイダー・J編『布と人間』（佐野敏行訳）ドメス出版、pp. 359–397。
- 文山県誌編纂委員会編
1999 『文山県誌』雲南人民出版社。
- 文山壮族苗族自治州概況編写組編
2008 『文山壮族苗族自治州概況』民族出版社。
- 文山壮族苗族自治州苗学発展研究会編
2008 『文山苗族』雲南民族出版社。
- Wronska-Friend, Maria
2004 Globalised Threads: Costumes of the Hmong Community in North Queensland in Tapp, N. and Lee, G. (ed.) *The Hmong of Australia: Culture and Diaspora*, Pandanus Books, pp. 97–122.
- 熊玉有・戴虹恩（Diana Cohen）
2005 『苗漢英学習実用手冊』雲南民族出版社。
- 張永祥主編
1990 『苗漢詞典 黔東方言』貴州民族出版社。
- ウェブサイト
『中国服装網』「苗族服飾出洋記（2002年10月10日）」
（<http://www.efu.com.cn/info/technique/2002-10-10/10269.htm>）2007年7月4日。
『阿里巴巴』「広西開発高档苧麻民族服飾面料（2002年9月28日）」
（<http://info.china.alibaba.com/news/detail/v3-d5188155.html>）2009年11月3日。

The Process of Ethnic Dress-making as Ready-made Production: Changing aspects of Miao dress in Yunnan, China

MIYAWAKI, Chie

The Graduate University for Advanced Studies,
Doctoral Program in School of Cultural and Social Studies

The purpose of this article is to examine the process and characteristics of the shift to ready-mades among the Miao (who call themselves Hmong) in Yunnan and to discuss, through the phenomenon of ready-made production, what has been inherited or what has changed in Miao dresses and their living environment. Miao people, who live in Wenshan Autonomous Prefecture of Yunnan, traditionally make their dresses by themselves and wear them daily. Since the 1990s, however, Miao dress-making has been experiencing major changes due to the rising use of ready-made production. Before the 1980s, the main material of Miao dresses was hemp, and they were made by women at home. The home-made dresses have characteristics which do not step out of traditional style, beyond some variations in detail depending on the creator and function -- formal dresses for festivals and daily use are divided according to whether they are old or new.

When factories and individual tailors began producing Miao dresses as commodities after the 1990s, a division of labor and improvements in the efficiency of production resulted. Ready-made dresses became fashionable due to their designs and vivid colors due to the use of chemical dyes. The difference between formal dresses for festivals and daily use now depends on whether they are in fashion or not. Ready-made production has been helping the circulation of traditional clothing among the Hmong in the U.S.A and has been increasing purchasing power among Miao in Wenshan. In both cases, producers meet consumers depending on the discretion of individuals, and their consumers are Miao or Hmong, who have common roots. The reasons the purchase of ready-made dresses has been increasing in Wenshan are for the functionality required by movements in their daily lives, and their values as Miao appear in situations such as weddings or rituals. Thus, Miao people also wear the ready-made dresses.

As the result, it is clear that ready-made production has changed their process of traditional production, design, and dyeing, as well as the way the dresses are worn. And the economic characteristics of Miao fashion, which have been shifting to the use of ready-made dresses, are “mass production” relying on individual discretion, as well as having personal relationships with their tailors. But their fundamental conception of Miao traditional fashion has not changed. Miao people regard this major change not as a separation from tradition, but as its continuation. They wear Miao dresses as Miao.

Key words: Miao/Hmong, ethnic dress, ready-made, change